



今月の先生

岐阜市民病院
加藤 則廣 氏
診療局長 (内科)
消化器内科部長

昭和56年 岐阜大学医学部卒業
平成18年 消化器内科部長
平成23年 診療局長 (内科)
日本消化器病学会専門医
日本消化器内視鏡学会専門医
日本消化管学会専門医
日本肝臓学会専門医
日本内科学会認定医

早期に胃癌と診断された患者さんは、胃カメラを使用した新しい治療方法が受けられるようです。
今回は、早期胃癌の新しい治療方法についてお伺いしました。

Q1 胃癌は減っていないと聞きましたが本当ですか？

A 確かに厚生労働省の統計では、胃癌で亡くなる患者さんは減ってきています。最近の医学の進歩により、早い時期に胃癌と診断されて適切に治療されるようになったためですが、実は胃癌と診断される患者さんの数はほとんど変わっていません。

胃癌はピロリ菌感染と強い因果関係があるとされています。高齢者は若年者に比してピロリ菌の感染率は高く、しばらくの間は高齢者人口の増加が続くため、今後も胃癌の発生数は減らないと推察されています。

Q2 早期胃癌であれば、どうして胃カメラで治療ができるのですか？

A 癌は粘膜から発生しますが、癌が粘膜か粘膜の少し下までにとどまれば、リンパ節など他に転移することはほとんどありません。従って、癌の部分だけ胃カメラで切除すれば良いわけです。

Q3 早期胃癌に対する内視鏡的粘膜下層剥離術 (ESD) について教えてください。

A 早期胃癌に対する胃カメラを用いた新しい治療法です。従来の方法と比べて、早期胃癌と診断された領域を胃カメラで確実に一括して切除できます。一括切除の利点は、術後に切除された粘膜を検査して本当に早期胃癌であるかを診断できます。

Q4 どのような早期胃癌がESDの治療の対象となりますか？

A ESDの治療の対象となる早期胃癌は、現在の胃癌治療ガイドラインでは、原則として、
1) 形態が隆起型で潰瘍を伴っていない
2) 大きさが2 cm以内
3) 病理組織診断が分化型癌とされています。癌は一般的に分化型癌と未分化型癌に分類されます。未分化型癌は分化型癌に比して他に転移しやすいので原則としてESDを施行しません。

Q6 ESDの術後はどのような点に注意する必要がありますか？

A ESDで切除した後には胃潰瘍ができますが、お薬で約2ヶ月後に治癒します。ピロリ菌の感染が陽性であれば、除菌治療を行います。除菌治療により、他の部位での胃癌の発生を抑制させるとの研究報告があるからです。その後も年に1回の定期的な胃カメラで経過観察を行います。

切除された標本は病理学的に検査を行って早期胃癌であることを確認します。もし癌細胞が粘膜下層などの深い部位にみられれば、外科手術を考慮することになります。

Q5 ESDはどのような方法でされるのですか？

A 胃カメラで確実な早期胃癌の領域を診断して切除範囲を決定します。早期胃癌と診断された領域の粘膜下に薬剤を胃カメラ用の注射針で注入してESD用を開発された特殊な高周波ナイフで切除します。所用時間は部位と大きさにもよりますがほぼ1時間以内に終了します。また鎮静剤を用いますので、ESD施行中に患者さんは苦痛をほとんど感じません。

合併症としては、切除部位からの出血や、穿孔といって胃に穴があくこともあります。穿孔はほとんどは胃カメラで止血や縫合ができます。そしてESD施行の翌日に胃カメラを施行して、出血がなければ食事を開始し経過が良ければほぼ1週間で退院できます。

